

齊藤誠先生のひとと業績

事故後直ちに挑んだ経済学者としての責任

大阪大学社会経済研究所教授

おおたけ ふみお
大竹 文雄

1、学術研究と時論分析

齊藤誠さんは、現実の日本経済をマクロ経済学・金融理論の視点で理解し、それを学術論文に仕上げると同時に、一般向けにも紹介するという努力を常にこなしてきた経済学者である。現在の経済学は、数学や統計学を駆使する学問なので、経済学者の研究スタイルは人文社会系というよりは、自然科学系や工学系の研究者に近くなっている。齊藤さんは、経済学の中でも技術的な要素が比較的強い分野であるマクロ経済学という分野で、最先端の研究を行う一方で、文学や歴史といった伝統的

な人文社会科学に関する深く幅広い知識をもった教養人でもある。

経済学者の仕事は、経済学という学問を進歩させるといふ理学的側面をもつと同時に、現実の経済問題に対処するという工学的側面も同時にもつ。実際、ケインズは師のアルフレッド・マーシャルの追悼文で、経済学者はその時々々の経済問題を扱ったパンフレットを書き飛ばすべきだと書いている(“Alfred Marshall, 1842-1924,” *The Economic Journal*, 34: 135, 311-372)。

しかしこれは、「言うは易く行なうは難し」である。

東日本大震災が発生した際に、多く

の経済学者は、経済学者にできることは何かということに自問した。原発事故についてもそうだ。しかし、原発事故については、そもそも事故の状況や技術的問題について分からないことが多かった。その上、原発問題については、もともと賛成と反対が激しく対立していた。そういう状況で、経済学の観点から原発問題に深く切り込んだ発言を同時進行的にネット上で行ったのが齊藤氏である。そして、彼は事故発生から半年後という時点でそれを書物としてまとめたのである。経済学者の一人として、日本の重大問題に関するパンフレットを書くという仕事をしてくれた齊藤氏を誇らしく思っている。その書物が第三三回石橋湛山賞を受賞することは素晴らしいし、選考委員会に敬意を表したい。

2、齊藤先生の業績

齊藤誠氏の業績は非常に多岐におよぶ。

二〇二二年一〇月時点で、著書・翻訳書は一五冊、学術論文は七四編、その他の論文や報告書は一七八編もある。齊藤誠氏は今までも多くの賞を受賞してきた。中でも、二〇〇一年には「金融技術の考え方・使い方——リスクと流動性の経済学」で第四四回日経・経済図書文化賞、二〇〇八年には「資産価格とマクロ経済」で第四八回エコノミスト賞を受賞している。

また、実証面や政策面を中心に優れた経済学研究を行った五〇歳未満の研究者に授与される日本経済学会石川賞を、二〇〇七年に齊藤氏は受賞している。日本経済学会のホームページに掲載されている受賞理由が、齊藤氏の経済学の研究面での功績を的確に紹介している。

その冒頭に、「齊藤誠氏は、マクロ経済、金融の分野で理論、実証、政策の三分野にバランスのとれた研究を行ってきた。専門化の進んだ経済学において、このようなバランスのとれた

業績を出すことは容易ではなく、主として実証・政策の分野で優れた実績を挙げた経済学への賞である石川賞においても、理論の貢献もなされているといふことは特筆すべきだし、賞の目的をいささかも汚すものではない。」と述べられており、齊藤氏の業績についての経済学者の共通の評価だと言える。そして、齊藤氏の一連の理論的研究が政策評価に役立つことも評価されている。具体的には「金融取引の制約、保険市場が不完備、といった状況下において、資産価格がどのように決定するのかを分析した。特に資産価格形成や資源配分と、所得・資産配分との間の相互依存関係や、その動学的推移を簡単な理論モデルで解明し、完備市場からの乖離に基づきながら資産価格による厚生評価、そしてマクロ経済の評価を提示している。」という点である。

また齊藤氏の実証的分析については、「様々な金融リスク、金融政策ショック、自然災害リスク、所得や健康のり

スクにおいて、日本のデータを用いながら、(中略)：資産価格理論やその他のリスク決定論を検証している。これら金融、自然災害、社会保障といった諸分野の実証を通じて政策的含意を導出し、望ましい政策のあり方を提言している。厳密な理論と科学的実証に裏付けられた政策論議には、信頼性の高さがある。」という評価が与えられている。

また、「教育に関してもマクロ経済、金融の分野において、多くの読者を招いた教科書を出版している。政策に関しても時折経済政策の提言を行っている。」ことについても、明示的に高い評価が与えられている。

齊藤氏の研究スタイルは、現代的なマクロ経済学やファイナンスの理論を用い、実証分析を行うというものが多かった。こうした研究では、伝統的な経済学が想定してきた非常に合理的な人間を前提に分析が行われていた。

齊藤氏は、最近では現実的な人間行

動を前提にした研究にも取り組んでいる。その成果の一つが、二〇一二年三月に出版された齊藤誠氏と中川雅之氏の編著である「人間行動から考える地震リスクのマネジメント——新しい社会制度を設計する」という書物である。この本では、人々の住宅に関する意思決定が、コンテキストや現状によって左右されてしまうことを実証的に明らかにし、耐震性が高い住宅を普及させるための現実的な提言を行っている。

こうした行動経済学的手法による研究成果は、『原発危機の経済学』にも活かされている。

非常に合理的な人間を前提にしたマクロ経済学の分析と現実の人間を前提にした行動経済学的な分析の關係について、齊藤氏はつぎのような趣旨の発言をしたことがある。「伝統的なマクロ経済学というのは、月から地球の経済の動きを観察して、その動きの特性を分析するようなものであり、それで経済の動きをできるだけ単純に説明で

きることを目指すものだ。一方、行動経済学的アプローチは、人間のすぐ近くで現実の人間の行動を観察し、その行動を説明するモデルを作成し、分析するものだ。現実の政策を行う上では、後者も必要だ。」私の記憶が間違っていないかもしれないということを断つた上で、齊藤氏の現実の経済問題を分析する際の柔軟な態度がわかる発言だ。

3、齊藤先生という人

齊藤誠という人を一言で表すとすれば、「自分に厳しい優れた教養人」と言える。非常に頭がよくて、教養がある上に、自分に厳しく研究も教育も常に全力を尽くす。それに、研究者にとつて不可欠な、いい意味での頑固なところがある。経済学会では多くの人に尊敬されている研究者である。

私は京都大学で齊藤氏と一年生の頃から経済学の勉強を共にしてきた。そこで、齊藤氏の学生時代の様子と経済学研究者となるまでを紹介してみたい。

私が齊藤氏に初めて出会ったのは、京都大学の一回生の九月、経済学部配当の数学の定期試験会場だった。試験会場は満席である。数学の担当教員は故森数教授で、普段の森教授の授業の出席者は数人だけだった。しかし、友人との相談、試験問題を持ち帰り後で提出もOKという変わった試験だったため、受験者が多かったのだ。一通り問題を解き終わった私は隣の学生と答え合わせをした。見事な答案を書いていたその学生とは授業では会った記憶がなかったが、同じクラスだと判明した。その学生が齊藤誠さんだった。少し話しているうちに気があって、経済学の古典を読む読書会に参加してもらった。国富論や一般理論を読んでいた。

その頃、経済研究所の森口親司教授が経済学の勉強会をするという案内が、大学の掲示板に貼られていた。齊藤氏と私はその勉強会に参加することにした。森口先生の勉強会では、当時の定

番の教科書だった今井・宇沢・小宮・根岸・村上著「価格理論」を読んだ。主に教えてくれたのは、当時研究所の助手だった中村二郎氏（現日本大学教授）と、学部の三回生だった四塚利樹氏（現早稲田大学教授）である。時々、当時大学院生だった浅田彰氏（現京都造形芸術大学大学院院長）も教えてくれた。

浅田氏の教え方は本当に見事で、頭の良い人というのはこういう風に教えることができるのだと、齊藤氏も私も感嘆したことを覚えている。四塚氏は、大阪大学大学院に進学、M I Tで博士号を取って、シカゴ大学助教授の後、フアイナンスの実務の世界で活躍して、現在早稲田大学教授である。贅沢な勉強会だった。

私たちは、三回生から、その年に横浜国立大学から京大に移られてきた西村周三先生（現国立社会保障・人口問題研究所所長）のゼミに入った。西村先生は、私たちに経済学の面白さを巧

みに伝えて下さった。学生をやる気にさせる西村先生の技は、身につけたいと思ってもなかなかできない。齊藤氏は日本の相続慣行に関する経済学的な分析をゼミ論で書いた。学部生の論文としては非常に優れていたはずだ。西村先生も齊藤氏が将来学者になることを一番期待していたと思う。ゼミの一年下にも優秀な後輩が入ってきた。

岩本康志氏（現東京大学教授）と中川雅之氏（現日本大学教授）だ。私たちは、森口先生の研究会と西村ゼミでずいぶん鍛えられた。

齊藤氏は、学部の卒業時点で大学院には進学せず、住友信託銀行に就職した。銀行では調査部で活躍し、スタンフォード大学、M I Tに留学して、博士号を取得して、プリティッシュ・コロンビア大学で教えた。その後京都大学、大阪大学を経て、現在一橋大学で教えている。彼が金融というテーマを現在でも専門にしているのは、銀行での勤務経験が影響しているのだろう。

齊藤氏と議論していると、私の仮説や発言に対して「にわかには信じられない」と言うことが多い。人の考え方を簡単には受け入れないところがある。しかし、しばらく考えて納得がいくと、言い出した私よりもはるかに深く物事の本質を理解してしまう。それは学生時代から全く変わらない。

私はなんでも気軽に新しいことを始めるほうだ。ツイッターも私の方が早く始めた。齊藤氏はなかなか手を出さなかったが、ツイッターを始めると私よりはるかに多く書き込みをしている。行動経済学についても私が研究を始めるときは、かなり懐疑的だった。しかし今では、齊藤氏は行動経済学で多くの業績をあげている。

齊藤氏は、経済学者としての社会的責任を強く意識している研究者である。その姿勢こそが多くの経済学者からの尊敬を集めるのだろう。これからも日本を代表する経済学者として大車輪の活躍をしてくれるはずだ。